エリヤハウスの間違いとその教訓

佐々木正明
２０１６年8月２９～３１日
九州教区教職研修会講義

私たちの周辺で、エリヤハウスを名乗る人たちの活動を、耳にするようになってすでに久しい。とはいえ、日本の片隅で伝道の働きをしている小生には、噂に聞いた程度で、実際の活動に触れたこともなく、その影響を感じたこともなかった。ただ昨年の晩夏に、先輩牧師のひとりから、私たちの教団にもこの働きが相当広まって、大きな問題に発展する可能性があるから、調査して小文を書くようにと「優しく」命じられたため、「従順な僕」であろうと願う小生は、その命令に素直に従うことにした。

さっそく資料を集めて調べ、問題点を洗い出すうちに、先輩牧師の憂慮が単なる杞憂ではないばかりか、大きな問題を孕んでことに気付き、書き上げた小文を全国の教団教職にお送りし、注意を促すことにした。

これが、意外と多くの教職の反応を呼び、感謝のお言葉もたくさんいただいた。また、教団教職から拙文を入手されたと思われる、教団外の教職・信徒からの反応も少なくなかったことから、改めてこの働きが各地で問題を起こしていることを教えられた。ただ、反論と言えるものは、当時わが教団の理事をしておられ、エリヤハウスを熱心に進めておられた増田先生からの文書だけであった。また増田先生の文書が、小生だけにではなく教団の複数の教職にも送られていたことから、小生は改めてこれに応答して、反論を書き全国の教職にお送りした。

短期間での調査であり、間違いもあるに違いないので、気付いた時にはお教え願いたいと
最初の文書でお願いしておいたが、この問題について詳しく学んでおられる教団外の方々からの注意喚起が一か所あった。それは、エリヤハウスの学びをする際に発生する、諸経費について論じたときに引用した、東京キリスト教神学研究所の文書の記述が、信頼のおけないものであるということであった。

小生が増田先生の反論にお応えした文書を送ったすぐ後に、教団の代議員の選挙があり、増田先生も選出されたのだが、先生はこれを辞退なさった。結果として、理事もお辞めになることとなった。これが、小生の文書にも関係しての決断だったのかどうかは知らないが、エリヤハウスの活動自体から身を引いたという話は聞いていない。（増田先生のお名前を匿名にしようかとも思ったが、すでにこの件においては公にされているので、実名にした。）

今回のこの文書は、九州教区教職修養会で改めてこの問題について論じるように、教区会で指名を受けたために、レジメとして準備するものである。ただ今回の修養会ではエリヤハウスだけに止まらず、関連する問題を含む様々な「キリスト教活動」についても取り扱うことで合意した。教区内教職の理解を深め、エリヤハウスに限らず、誤った教えに対する健全な抵抗力をつけておこうということである。

１．　エリヤハウスの始まり

エリヤハウスは、ジョン＆ポーラ・サンフォード（John & Paula Sandford）夫妻によって、1974 にアメリカで創立された。（John は 1929～2002 年、Paula は 1931～2012 年、1951 年に結婚。創立を 1973 年あるいは 1975 年としているエリヤハウスの文書もある。）　当時夫妻はすでに会衆派教会の伝道者として経験を積んでいた。彼らは、アグネス・サンフォード（Agnes Sanford 1898~1982）に感銘を受け、数年働きを共にしてインナー・ヒーリングを学んだ。アグネスは、中国への組合教会宣教師の娘でアングリカンの司祭の妻。アグネスの教えはセキュラーな世界と教会内に広がったが、クリスチャン信仰としてキリスト教界に大きく広めたのはジョン&ポーラ・サンフォードである。特にペンテコステ系の教会、なかでも第三の波の間に受け入れられ、２０数か国に支部を持つとのことである。現在は息子のマーク・サンフォード（Mark Sandford）が主宰している。

２．　エリヤハウスの背景

アグネス・サンフォードは、フロイトとユングという二人の心理学者に多大な影響を受けて、(ただし現代の心理学の世界では、フロイトの理論もユングの理論も、実証性のない、つまり科学性のない過去の理論とされています。）インナー・ヒーリングを始め、教会内にも一般世界にも大きな影響を与えた。

フロイト（1856~1939）　　フロイトは潜在意識、行動の動機としての性的衝動、夢の解釈などで知られ、心理学の分野で多大な影響を与えた。特に、インナー・ヒーリングンに影響を与えたのは、潜在意識の考え方と性的衝動である。ちなみにフロイトは、１）oral　口　0~18 カ月　２）anal　肛門　１８～３６カ月　３）phallic　ペニス　３～５年　４) genial (through puberty) 思春期を通しての柔和　と分けた。彼によると幼少時の体験(５歳まで) が人生を決める。

ユング (1875~1982)　　フロイトに学びのちに袂を分かった。フロイトは無神論者であったが、ユングは牧師の子弟。基本的にフロイトの潜在意識の考えを延長して、深層心理なるものを強調したが、心霊的な事象をも取り入れ、性的な衝動よりもすべての動物が共

有している無意識の意識を重んじ、これがあらゆる行動に影響していると考えた。インナー・ヒーリングは、彼のオカルト的傾向に強く影響を受けている。

オカルト的体験主義　　ジョン＆ポーラ・サンフォードは、ユングの心理学、東洋神秘主義、師と仰ぐアグネス・サンフォードの「聖霊のバプテスマの体験」と自らの「聖霊のバプテスマの体験」、さらにニューエイジ運動、ヒッピー運動などに影響され、キリスト教の教えとオカルト的な体験主義とを混ぜ合わせた、カウンセリング・セラピーを行うようになった。

３．　日本におけるエリヤハウスの現状

エリヤハウスは日本にも活動拠点を置き、主にカリスマ、第三の波、ペンテコステと原理主義的傾向を持つグループに広まっている。ちなみに私たちの教団内にも相当浸透していると考えられる。エリヤハウスの教えすべてではないまでも、様々な形でかなり取り入れられている。教団理事たちの間にもこれを取り入れている教職がいるし、相当の大教会の教職たちも賛同していると聞く。

現時点で、「エリヤハウス・ジャパン」でネット検索すると以下のような情報が得られる。

エリヤハウス･ジャパン　スタッフ

[エリヤハウス･ジャパン　主事]　三浦　雅範･由美子

[トレーニング　ディレクター]　小深田　隆子

【推薦しもべチーム】

益田　良一　師　／　日本福音キリスト教会連合　グレースコミュニティ　牧師

月井　　博　　師　／　日本福音キリスト教会連合　本郷台キリスト教会　牧師

増田　哲之　師　／　アッセンブリーズ･オブ･ゴッド教団　シティビジョン･グローリーチャーチ　牧師

田坂　元彦　師　／　日本バプテスト連盟　　横浜ニューライフバプテスト教会　牧師

中村　陽志　師　／　熊本ハーベストチャーチ　牧師



杉崎　　弘　　師　／　　福音伝道教団　桐生キリスト教会　牧師

[エリヤハウスジャパン･アドバイザー]

浜崎　英一　師　／　日本バプテスト連盟　大津バプテスト教会　前牧師、JCMN アドバイザー

そして左の写真が載せられている。

またフェイスブックにはエリヤハウスの働きの紹介として、次ページの写真が載せられている。探せばまだまだ私たちに馴染みのある顔が見つかるに違いない。

４．エリヤハウスの基本的教え

エリヤハウスの基本的な教えは、聖書の教えとインナー・ヒーリングと名付けられた心霊術的心理療法を、組み合わせたものである。彼らによると、現在のあらゆる苦しみは、潜在意識となって記憶の外に残っている、「過去に受けた被害の苦しみ」からもたらされたものである。そこで、この潜在意識となっている苦しみの体験の記憶を幸せな記憶に変えることによって、現在の苦しみからクリスチャンたちを解放することである。

エリヤハウスは、フロイトの「幼少期の体験」よりも一歩進めて子宮内での体験を強調する。マリヤとエリサベツが出会ったとき胎内のヨハネが踊ったと記述されていることを、子宮内体験の聖書的裏付けとするが、まったく誤った解釈である。子宮内体験まで含める彼らのインナー・ヒーリングでは、性的ことがらを取り扱うことが非常に多い。「妊娠中の母親の性行為は、胎児にペニスに似た形状のものに恐怖を抱かせるようになる」というチンプンな教えに始まり、「おまるの躾、おしめの取り扱いなどで、性器に対する誤った意識を持つようにさせてしまう」などと、かなり具体的に、つまり露骨に教えられる。

フロイトやユングなどの心理学は、様々な観察データから結論を導き出す、一見科学的な帰納法から出発しているが、データの集積と分析が前時代的で、あまりにも非科学的である。そこで導き出された結論はあくまでも仮定に過ぎないが、その仮定を絶対の前提として演繹法的に物事を考えるために、ますます非科学的になっている。人間の行動をみな性衝動の現れと考えるフロイトの理論などは、その良い例である。心理学という学問の分野自体に、現在でもこの非科学的要素が強く、怪しげなものが多い。ただし、コンピュータの発達などで、データの集積と分析が飛躍的に発展したため、統計的に信頼できる部分が多くなっているのも事実である。とはいえ、集められるデータそのものが、科学的分析の可能な「物質に関するもの」ではなく、科学的取り扱いが困難な心理的事象であるために、真の意味で科学的な証明ができているとは言い難い。エリヤハウスの基本的教えのインナー・ヒーリングは、このような証明不可能な「聖書の教えではない」理論に立っているものであって、正当なクリスチャン信仰としては認められない。彼らの主張は以下のようなものである。

- **現在のあらゆる苦しみは、潜在意識（無意識の記憶）となった過去の苦い被害体験によってもたらされる。**　過去の苦い体験は「被害」であって、自己の罪や過ちによるものではない。この潜在意識となった過去の苦い体験を、彼らは「インナー・チャイルド」あるいは「根」と呼ぶ。これは、苦しみの原因を過去の被害の潜在意識のせいにする責任転嫁であって、悪魔の支配下にあるこの世に、自分の罪と闘いながら生きているという、大切な聖書的世界観、原則が無視されている。
- **キリストの救いを体験して、現在の苦しみが一時的に取り除かれたとしても、過去の苦い被害の体験が潜在意識として残っていて、様々な人生苦をもたらし続ける。だから、この潜在意識という「根」を引き抜かなければ、苦しみという草は生え続けて、完全な解決にはならない。**　エリヤハウスの主張によると、現在のキリスト教の欠点は、草を摘んで根を摘んでいないこと、根の存在に気付いていないことであるが、これは完全に聖書の明確な教えの否定であり、キリストの救いのみ業の及ぶ範囲を狭めるものである。聖書は聖霊が過去を変えることができると強調している。クリスチャンは生まれ変わったものであり、新しい命を持つものであり、聖霊に住んでいただくものであり、キリストと共に甦らさたものである。原則的に過去と手を切ったものである。その原則は、聖霊の働きによって、日常の生活の中で実現されて行くのである。

  聖書には、「インナー・チャイルド」や「根」の教えは全くない。彼らが自分たちの教えの聖書的根拠として引用する二つの聖句（エレミヤ１：１０、マタイ３：１０）も、エリヤハウスの主張とはまったく関わりがない。聖書主義を標榜する多くの無知な牧師やクリスチャンたちがこれに騙され、今まで知らなかった大切な真理であるかのように、喜々として受け入れているのは実に情けない。
- **過去のつらい被害体験は、潜在意識として残っているのであって、記憶としては残っていない。そのため、まず、その被害体験がなんであったのかを、潜在意識の中から探り出さなければならない。**　人間が潜在意識に影響されるというのは、現代ではある程度のデータを集めて、可能性としては証明されるかもしれない。ただし、それが現在のあらゆる面に影響を与える強い力であるという証明はできていない。それはあくまでも仮定に過ぎない。

  大切なのは、聖書はそれについて何も語っていないことである。人生問題の枝葉末節ならば、聖書が触れなかったのも理解できるが、これは枝葉末節ではない。ということは、この教えが聖書の教えとは相容れないものであるということである。聖書は、罪に拘束され、悪魔の支配下であるこの世に死んでいた者が、キリストと共に甦らされたと語り、過去の自分に拘束されない生き方ができると、明確に教えている。
- **潜在意識を探り出す働きは、経験を積んだカウンセラーが手助けする。カウンセラーは根元に斧を置く働き（マタイ 3:10）をするのである。**　たとえ潜在意識が現在の行動に影響

するようなことがあるとしても、また、それを心理学的に取り扱ってある程度の助けを与えることができたとしても、聖書は過去の苦い被害体験の潜在意識には全く触れていない。また、過去の体験が現在のあらゆる分野に悪い影響を及ぼすなどとも教えていない。むしろ私たちは、現在の信徒の心に働きかけてくださる聖霊のお働きを、聖書の中から説明し、聖霊に働いていただくことを強調しなければならない。私たちは聖霊派の教会として、聖霊のバプテスマをルカの神学、つまり宣教の神学としてばかり捉えて、パウロの内住の聖霊、あるいは教会論的な聖霊の取り扱いをしてこなかったことに、臍を噛む思いをする。（後述）

さらに、科学的にも証明されていない潜在意識のもととなる、実際にあったかどうかさえ分からない、「想定上」の被害体験を探り出すオカルト的作業には、カウンセラーによる意識の刷り込み、洗脳の危険が非常に大きい。事実、まったくの虚偽、あるいは架空の被害の虜になって（被害妄想）、危害を与えたと想定される人物（親や家族・親友など、身近なものが多い）を、裁判に訴える笑えない例がたくさん起こっている。想定上の架空の被害を作り出し、それを心霊的手法でカウンセリングして、現在の苦しみの解決とするようなクリスチャン体験は、疑似体験というより偽物体験である。

・ **過去の苦い被害体験に、想像上のキリストに登場してもらい、嬉しく優しい体験に変えてもらう。** カトリックの場合はキリストがマリヤとなるなど、それぞれの信仰や世界観によって、想像上の登場人物は異なる。たとえ想像上の登場人物がキリストであっても、これはまったく非聖書的で、心霊術的あるいは降霊術的要素が強い、非常に危険な方法である。聖書は、過去の悲しい被害体験にさかのぼって登場する「想像上のキリスト」ではなく、今も昔と変わらずに現実の世界に生きて働いておられる、現実のキリストをはっきりと指し示している。

ロールプレイなどを駆使した非聖書的手法、例えば経験を積んだ誰かが、キリストの役をして慰めを与えることによって、過去の苦しみの潜在意識から解放するなどという手法も、まったく非聖書的であり、心霊術的である。これはカウンセリングを受ける者が、キリストを想像できないために、補助策として編み出されたのではないかと思われる。それはまた潜在意識、つまり無意識の中に記憶されている被害であるために、カウンセラーの思いのままに意識を操り、架空の被害を作り上げて洗脳状態に持ち込むことができる。

これが、小牧者の手法や、使徒職や預言職の引き継ぎなどという、権威主義的牧会法と共に使用され、「師⇒弟子」の関係に用いられると非常に危険である。この手法はヒンズー教の要素が強く、アメリカでは「Sozo」と名付けられて、かなり広範囲に広がっている。また、このような非聖書的手法に慣れてしまうと、次々と非聖書的考えや行為を許してしまう。他人のために悔い改めの祈りをするなどということも、聖書は禁じていないと言って正当化するのである。

- **子宮内体験にしても幼児期の体験にしても、性的問題に触れることが多い。** これは、人間の行動を性的衝動で説明する、フロイトの心理学の影響を強く受けていると思われるが、人間の羞恥心を利用して、個人の尊厳を破壊する最も狡猾な洗脳手段に通じる。なかでも、性的問題を追及して、人の自己尊厳、自尊心を破壊すると、容易に隷属させることができるため、様々な意図を持つ者たちの間で多用されている。

５．　エリヤハウスと福音主義

エリヤハウスは創設者が福音主義の牧師であったために、いまでも福音主義を自称し、聖書も多用するが、実態は怪しげな福音主義で、聖書の解釈がなっていない。そのために同調者たちには、聖書に立脚していると聞けば、無批判になんでも受け入れてしまう、「脆弱な福音主義信仰者」、あるいは「心情的聖書主義者」が多い。聖書を霊感された神の言葉と信じ、絶対の権威として受け入れていながら、聖書の正しい読み方を知らないために、福音主義、聖書主義という言葉だけで実体のない主張に敬服し、畏怖をもって受け入れてしまったのである。具体的にはカリスマ、第三の波に賛同者が多く、伝統的ペンテコステにも及んでいる。

このような心情的聖書主義者は、エリヤハウス以外にも、聖書と何かほかの教えを混ぜ合わせた、例えば積極的思考、繁栄の福音、地域霊の追放など、アメリカの実利主義との混合宗教を容易に受け入れる傾向を持つ。いったんそうなると、歯止めはなかなか難しい。

エリヤハウスの福音主義は、原則的には、私たちアッセンブリーズ・オブ・ゴッドの福音主義と同じ立場に立つようである。それが、私たちの仲間にエリヤハウスを受け入れる者が多い事実に繋がっている。この福音主義はアメリカの南部バプテスト等、原理主義的傾向を帯びる教会と同じであり、聖書の字義通りの解釈を原則とし、極端なディスペンセーショナルな解釈を許すようにもなる性格を持っている。また、たとえば天地は、創世記 1 章に記されている通り、６日間の内にあの順序で造られたと信じる信仰である。福音主義、原理主義の信仰者の間ではそれに反対する者は、往々にして現代主義的信仰に陥ったと白眼視される。たしかに、天地は 6 日間で造られたと信じていても、救われる信仰としては全く問題がないと思われる。ルターも、カルビンも、ウエスレーもそのように信じていただろう。しかし現在そのような信仰を抱いているならば、聖書の健全な理解が妨げられる。

字義どおりの聖書解釈が、エリヤハウスの問題となっている顕著な例として、出エジプト記 20 章 5 節の、父の罪を子に報いて 3，4 代に及ぼすという記述を挙げることができる。エリヤハウスではこの記述を文字通り解釈して、親の罪の報いが子に及ぶと主張し、家系を探り、断ち切りの祈りをする聖書的根拠としているのである。

この十戒の一節は、無理な神学的立場に固執せず、常識をもって読むならば、正しい理解を得ることができるはずである。常識は、続く節の「恵みを施し千代に至る」という表現と比較し、これが恵みの 1000 を強調するための、３，４であることに気付く。つまりこ

れは、強調点を明らかにする表現方法、レトリックであって、文字通り解釈されてはならないものである。キリストが「私は門である」と語ったことを取り上げ、石の門か鉄の門かと議論するのと同じであり、「私は良い羊飼いである」という言葉を論じて、「キリストはどこで羊を飼っていたのであろうか。」「大工をしておられたのだから、多くの羊であったはずはないない」などと言い合うのと、同じくらい愚かなことである。

これと同じような間違いが、千年期後再臨説、大患難前再臨説など、それぞれの終末論の説を絶対視して、他の解釈や意見を認めない人たちの中に見られる。文字に表現された言葉の絶対性、用語の絶対性を主張する字句拘泥に陥ってはならない。一つの言葉は、前後関係、状況、時代によって、いかようにも変化するからである。(例：使徒 17：30 の「悔い改め」)

私たちが健全な福音主義的信仰を持ち続けるためには、健全な聖書解釈を学ばなければならない。私たちは聖書の一点一画が霊感された誤りのない神の言葉であり、神の権威をもつものであることを信じている。しかし、ユダヤ的な物事の考え方、記録や記述の方法、表現方法などを理解して聖書を読まなければ、聖書の正しい解釈には行き着けない。例えば物語法はどうだろ。キリストはたとえ話をもって多くのことを教えたが、これも一種の物語法である。それは事実ではないが、真実として語られたのである。

事実と真実は別のものである。事実を記すのが真実ではない。マタイの福音書のキリストの系図は事実ではない。ユダヤ式の記述法にのっとった真理の表現である。天地創造にしてもそうである。天地は 1 日 24 時間の 6 日間で創造されたのではない。キリストは第 7 日目に神が休まれたことを否定なさっている。（ヨハネ５:１７）　ユダヤ式の真理の伝達法では、7 日目に神がお休みになったと記されても、問題がなかったのである。

現代科学と矛盾する聖書の記述を、神の言葉という信仰をもって、ただ聖書の字義通りの解釈で片付けようとする人たちは、自分の考える能力を軽視し、聖書の無理な解釈でも、ただ権威のあるものとして受け入れようとするために、エリヤハウスのような滅茶苦茶な間違いにも気づかないのである。ここで、聖書を正しく理解するために、また誤った極端な意見に流れないために、聖書解釈の要点を述べておく。

- **ひとつの用語やひとつの句、あるいは 1 節だけを切り離して、解釈してはならない。**用語の原意を探ることは重要であるが、それに縛られてはならない。用語の意味は前後関係、状況などの要因で大きく変化する。
- **ひとつの区切りの中だけで解釈してはならない。**これはひとつの用語から解釈するよりはずっと良いが、その書全体の主旨から理解しなければならない。その書がどういう背景の中で、どういう事情で、誰によって、誰に向けて書かれたかを考慮して理解しなければならない。
- **ひとつの書の理解だけで解釈してはならない。**　聖書全体の教え、総合的な教えの中で、その教えがどういう意味を持つのかを考える。その解釈が聖書全体の教えと調和す

るか。なぜそのようなことが言われているのか、背景の事情も考慮して理解する。エズラ、ネヘミヤなどの律法主義的傾向の強い書がある反面、ルツやヨナなどの異邦人に対する律法を超えた優しさを際立たせている書もある。聖書全体の中で、歴史背景も考慮して考えなければならない。一人の人間も、見る角度によって全く異なった形をしているように、聖書の教える真理も非常に大きく、見る方向、読む角度によって全く異なる。小指の機能と耳の機能は全く異なっていながら、あるいは矛盾する機能でありながら、人体全体の機能の一部として、完全に調和する。互いに矛盾するような書もあり、表現もあるが聖書は完全に調和するのである。ヤコブ書を「藁の書」と呼んだルターは、それを理解しなかったようである。

・ **自分たちの伝統的解釈に固執してはならない。** ・・・・ちょっと勇気が必要になるが、幸い私たちの教団は、まじめに聖書の理解を追及する態度を尊ぶ。しっかりとした聖書解釈の原則に立った、理解を持たなければならない。福音派には福音派の伝統的解釈があるが、必ずしも正しいとは限らない。（例えば聖餐論、洗礼論、教会論、十一献金）アッセンブリーズ・オブ・ゴッドにはアッセンブリーズ・オブ・ゴッドの伝統的解釈があるが、バプテストやホーリネスの間違いを引き継いでいるものや、（聖霊と火のバプテスマの理解や洗礼についての理解）正しい聖書解釈を遺脱しているものもある。（異言による預言・後述）

６．　体験主義

エリヤハウスは原則的に体験主義である。自分たちに都合の良いことは良いこと、益になることは良いことという、アメリカ型プラグマティズムの影響が強く、信徒が苦しみから解放された、教会が大きくなった、献金が増えたなどの体験の証によって広められ、利益を追求する宗教心によって受け入れられる。エリヤハウスの創設者の Sandford もその教師であった Sanford も、ともに「聖霊のバプテスマ」を体験したと主張する共通点があり、現代の私たちの中に見られる体験主義的傾向に通じる。

信仰体験を大切にするのは、確かに私たちアッセンブリーズ・オブ・ゴッドの信仰の在り方である。私たちは信仰には体験が伴うと主張し、その神学を誇りとしている。聖霊のバプテスマの神学自体が、聖書の教えを学んで聖霊の働きを理解したことにではなく、まず、聖霊のバプテスマを体験したことに始まった。それが体験主義信仰に陥らなかったのは、その体験を体験だけで終わらせず、しっかりと聖書を釈義し、正統的信仰の教えの中で理解したからである。

私たちは聖霊の働きの中に、今も変わらないキリストの御業を見る、体験重視の信仰を標榜しているのである。私たちの聖書標語は、ヘブル書 13 章 8 節である。人間の知性を重視し、自然科学をもちあげ、理神論に陥り、現代における神の奇跡的介入に疑問を抱き、聖書が信じられなくなった伝統的キリスト教への反動が、ペンテコステ運動である。

しかし、確認しておきたい。私たちは体験主義には陥らない。体験主義とは以下のような信仰形態を言う。

- **自分たちの体験に、聖書の教えや記述以上の価値と権威を置く。** 聖書の教えがどうあろうと、自分たちの体験の素晴らしさを優先し、そこに信仰の基盤を置く。聖書の記述や教えを、自分たちの体験に合わせて解釈する。これには私たちの間でもなじみのある、繁栄の福音、積極的思考、教会成長、レーマの神学、預言運動、地域霊の追放、断ち切りの祈り、「根」を取り除くカウンセリングその他が含まれる。
- **聖書に記されていない体験を信仰に取り入れる。** たとえば、倒れる・転がるといった良く知られた体験から、金粉が降る、金歯が生えるなどという、様々な不可思議な出来事を期待し、それを信じる信仰を強調する。ここには他の宗教や哲学が実践している、心霊術や降霊術を取り入れることも含まれ、奇術さえも取り入れられている。

　アッセンブリーズ・オブ・ゴッドの信仰と実践の中では、異言による預言と解き明かしがこれに相当する。このような聖書の教えにはない体験、あるいは聖書の教えに反する体験、すなわち非聖書的体験を、自分たちの信仰の実践の重要な一部とすることは、多くの非聖書的体験を無批判に受け入れる道を開くことになる。パウロは異言問題を取り扱ったとき、はっきりと「異言を話す者は、人に話すのではなく、神に話すのです」と語っている。神がそれを用いて人間に語り掛けるという機能は、異言にはない。それが明確な聖書の教えである。それにもかかわらず、私たちの集会で「異言の解き明かしによる預言」があることは、集会に聖霊の特別な臨在があって祝福されたものであったという、暗黙の了解となっている。これでは私たちも、少なくても一部分は、体験主義になっていると言わざるを得ない。

- **ある特定の事情の中で、特定の人が体験した特異な体験を、すべてのクリスチャンが体験すべき体験とする。** 自分の信仰体験を重視し、それをほかのクリスチャンにも要求するのは良くある間違いである。救われたとき、酒・たばこ・ギャンブルから解放されたという体験は、素晴らしいけれど、すべてのクリスチャンに求められる体験ではない。継続的清め、聖化は、すべてのクリスチャンが体験すべきこととして、聖書が教えるものである。しかしその経過における様々な体験は、共通体験として求められてはならない。

　異言を語る聖霊のバプテスマは、パウロが明快に述べているように、基本的にすべてのクリスチャンに与えられるものであり、すべてのクリスチャンが期待し、求め、体験すべきものである。使徒パウロは、はすべてのクリスチャンに異言を語ることを勧めている。しかし、ダマスコ途上で体験したキリストとの出会いや、第三の天に昇る体験は、それがいかに素晴らしいものであったとしても、ほかの者に勧めたり要求したりはしていない。

７．　体験主義とレストレーション

体験主義と深い関わりを持つものにレストレーション運動がある。レストレーション運動はまた、ペンテコステ運動と強いつながりを持ち、しばしば同じ穴の狢（むじな）と考えられてきた。しかしレストレーション運動は、ペンテコステ運動とは原則的に異なっていて、米国アッセンブリーズ・オブ・ゴッドはかなり初期のころから、この運動に対して警告を発して、少なくても 2 回にわたって（1949 年と 2000 年）教団として正式に教書を出して、その間違いを正している。

レストレーション運動の基本的主張は、その名のとおり復興である。もっと端的に言えば、初代の教会の姿を取り戻す、あるいは初代の教会の在り方に回帰する運動である。そういう意味ではペンテコステ運動も、初代のペンテコステの信仰、異言の伴う聖霊のバプテスマの体験を取り戻す運動であり、レストレーション運動の一面とも捉えられる。

しかし、ペンテコステ運動が異言の伴う聖霊のバプテスマの体験と、その聖霊体験によって力付けられた宣教、また聖霊の顕著な働きとしての癒しや悪霊の追放、その他の超自然現象を期待したのに対し、レストレーション運動は初代の教会の様々な在り方、例えば教会内の職や役割、形式、方式などまでも取り戻そうと考えた。たとえば、エペソ書 4 章 11 節に記されている 5 つの働きを職務と考えて、これらの職務すべてを現代の教会に取り戻そうと主張することなども含まれる。（正しい聖書解釈では 5 ではなく 4 であり、職ではなく機能である。）

そのような信仰から、例えば、使徒職や預言者職を現代教会に復興させ、その役割を回復させなければならないと考える。それで、使徒なるものを立ててその権威を主張し、按手をもってその職の継承を行ったり、預言者の設定をおこない預言の回復に力を注いだりしている。それが現代まで継承され、神の名を借りた人間の妄想的言葉がもてはやされ、権威主義的な指導が正当化されるなど、様々な弊害が起きている。「預言者の学校」などという怪しげなものもその一部であり、まじめに預言の練習が行われている。（預言者の学校は、もともと英語で言う school of prophets の日本語訳だと思われるが、これは列王記にしばしば記録されている、エリヤとエリシャの時代の預言の仲間たちのから来た表現のようである。日本語聖書では「ともがら」（口語・新共同）「仲間」（新改訳）と訳されているが、英語の聖書では、sons とか company と訳されることが多い。ただ、これがしばしば school of prophets と表現されてもいることもって、日本語にすると「預言者の学校」ともなる。ただしこの school は、「群れ」という意味であって「学校」ではない。）

弊害の実例を挙げると、1914 年に設立されたアッセンブリーズ・オブ・ゴッドは、その翌年の総会で大分裂を起こし、3 分の 1 のメンバーが分離したことがある。それは、初代に帰ろうという願いと、預言に新しい啓示を期待する雰囲気が、盛り上がりすぎた結果である。使徒の働きに記された、「イエスの名による洗礼」というフレーズに気付いた者が、洗礼は三位一体の神の名によってではなく、イエスの名によらなければならないと預言し、3

分の 1 のメンバーを説き伏せたのである。神の言葉の全体的な理解を捨てて、一つのフレーズだけを取り上げて解釈し、それを預言という神の名を騙った方法で持ち出して、メンバーを混乱させたのである。

このような悲劇的出来事も経験して、アッセンブリーズ・オブ・ゴッドは、預言に対する注意深い取り扱いや、聖書解釈の在り方について学び、結果として、レストレーション運動とも袂を分かつことになった。（預言に関わる問題は後述）とはいえ、多くの一般教職や信徒は、レストレーションとペンテコステ運動の違いに気付かなかった。そのため、この二つの運動はいつも手に手を携えて発展して来たとも言える。たとえば、「後の雨（ラター・レイン）」というフレーズは、常にペンテコステ運動に付随してきたが、これは、初めの雨を初代の教会のペンテコステ運動、後の雨を現代のペンテコステ運動ととらえて表現したものである。（参照・ヨエル 2：23） そのような混乱を和らげるため、アッセンブリーズ・オブ・ゴッドは教書を発表して、警告してきたのである。（この件については小生が翻訳し教職たちに配布した、アメリカ・アッセンブリーズ・オブ・ゴッドの教書、「終わりの時のリバイバル」を参照してほしい。新たに入手したい方は、小生に求めてほしい。）

現代においては、このレストレーション運動にも様々な枝分かれがあるようである。たとえば、「ダビデの幕屋」（Tabernacle of David）という運動がある。これは初代教会よりもさらに 1000 年も遡って、歴代誌 I の 16 章に記されているダビデの幕屋（天幕）の礼拝の記録に倣って、現代の教会でも常時、つまり 1 日 24 時間の礼拝形式を取り戻せと言っているようである。ダビデが音楽の責任を持たせたアサフとその兄弟たちに、毎日常に契約の箱の前で仕えさせたと記録されているからである。またダビデが音楽を重視し、大いに歌い様々な楽器を奏でる礼拝形式を整えたところから、音楽を強調し、ノリノリの賛美に重点を置くなどをしている。（私たちの教会の多くも、知ってか知らずか、彼らのノリノリを取り入れている）

ダビデの礼拝形式を取り戻せという主張の根拠は､アモス書の 9 勝 11 節にあるというが、ここでも、一つのフレーズだけを聖書全体から切り離し、字義通りの解釈をする典型的な間違いが犯されている。アモスが予言したのは、「教会が」ダビデの礼拝形式を取り戻すことではなく、「神が」イスラエルの国家的回復をもたらすことであるいうのが、一般的理解であり聖書全体の教えと調和する。

面白いことに、レストレーション運動は聖書の字義通りの解釈を強調すると共に、タイポロジー的な解釈、あるいは霊的解釈をも併せて強調する。要するに、自分に都合の良い解釈を用いる。アッセンブリーズ・オブ・ゴッドでも、字義通りに固執するディスペンセーション神学を取り入れるかと思えば、タイポロジーも取り入れている。強いディスペンセーション神学を取ると、レストレーションなどはあり得ないのだが、アッセンブリーズ・オブ・ゴッドの良いところは極端に走らず、両方を許容していることである。しかしこれがけじめのないご都合主義的解釈を許してしまっているのも事実である。それが、かなり道を外れた信仰者をも、忍耐と寛容をもって排除しないという、良い体質に繋がっている。

当然、教団には間違いに気付かず実践している者もいれば、そのような間違いと、実践している人を排除しようという人たちもいるが、今のところ柔軟性のある共同体に留まっている。

８．　正しい福音主義とは

私たちは、聖書の一点一画が霊感された誤りのない神の言葉だと信じ、私たちの正しい信仰と行動に、唯一で十分な権威をもつ導きの書であると信じている。しかし、聖書は真理（真実）の書であって、事実の書ではない。すでに述べたように、真理あるいは真実と事実の違いを知らなければならない。欧米の福音主義者、特に原理的傾向を持つ者たちは、事実が真実だという信念を持っているようであるが、それは聖書の立場ではない。キリストは「わたしは道であり、真理であり、命なのです」おっしゃった。これは神と人との間の関係をお語りになっているのであって、事実かどうかの問題ではない。

ルカ文書だけは例外となるだろうが、聖書はユダヤの文化を背景に書かれている。ユダヤの表現や記述の文化では、ギリシヤ文化とは異なり、時間と空間よりも出来事に重点を置く。例えば、マタイが記録した山上の垂訓は、ルカの記録したものとは時間や場所の配置が異なっている。マタイは様々なところで異なったときに語られたキリストの教えを一つにまとめて、あたかもある一日に、一か所で語られたものであるかにように記録しているが、ギリシヤ的な感覚、あるいは現代日本人的な感覚では、それは事実ではない。ただ、ユダヤ人的な文化ではそれは真実なのである。先にも触れたが、マタイが記録したキリストの家系も、14 ・ 14 ・ 14 とされているが、これも事実に反しながら、マタイが意図した真実の記録では、霊感を受けた誤りのないものである。創世記の天地創造の記述も、事実ではないが真実なのである。事実を真実と同じものと考えると、天地創造の記述はすべて事実であり科学的にも正しいのだなどと主張する、超原理主義者になってしまうか、聖書は信じるに足りない書物であると考えて、信仰を放棄してしまう人を増やすことになる一方、「ただ信じなさい」と指導された求道者が、「信じるとはどんなことでしょう。」「どうしても信じられないのです。」と、悩むことになるのです。

さらに聖書は、私たちの信仰と行動の十分な指導の書であり、唯一の権威ある書である。したがってこの聖書の教えに、ほかの権威から導入した教えを加えたり継ぎ足したりしてはならない。聖書は、神と人との間にあるべき正しい関係、すなわち真理と道と命、人間が生きるべき正しい姿、在り方を十分に教えている。ここにフロイトもユングも不要である。想像上のキリストも無用であり、カウンセラーも邪魔である。人間のすべての苦しみを味わってくださり、理解してくださるキリストこそ我らの仲保者であり、聖霊こそ我らのカウンセラー（パラクレートス）である。キリストと聖霊の役割を、人間が奪ってはならない。

ところで、アッセンブリーズ・オブ・ゴッドは現代における正真正銘の預言を信じる。もしそれが正真正銘の預言ならば、唯一の権威である聖書の権威が脅かされないだろうか。預言の言葉は、聖書の言葉と同等の権威を持つのだろうかという、福音主義信仰にとっては重大な問題が発生する。私たちは預言の性質を学び、聖書の権威との問題を解決しておかなければならない。

預言が正真正銘、神からの啓示であった場合でも、その権威は聖書の権威と同等とされてはならない。それは聖書が、唯一、神の霊感を受けた誤りのない神の言葉であるが、預言はたとえ神からの啓示を受けての預言であったとしても、霊感を受けていないからである。神の権威は啓示であるかどうかによるのではなく、霊感を受けているかどうかにかかるのである。霊感は聖書聖典が完結したときに終了している。聖書に書き足されてはならないのである。

聖書に記述されていることは、啓示によるものであろうが、啓示とは関係がない記録だろうが、それは神の霊感を受けて記述されたものであり、いわば神の押印がされているのである。ところが預言の言葉は、多くの場合、あくまでも啓示を見たり、聞き取ったりした人間の言葉であり、一字一句間違いのない神の言葉としての押印がない。霊感を受けた言葉と霊感を受けていない言葉の権威は、まったく異なるのである。だから、私たちは預言の言葉の真実さを確かめ、それが正真正銘のものと分かればそれを大切にし、その価値を認めるが、聖書の言葉と同等の権威は認めないのである。私たちが最終権威と認めるのは聖書だけである。

普通預言と言われているものの内容を分析すると、慰め、励まし、叱責、警告、表示、示唆、勧め、導き、命令などに分けられる。預言の言葉が神の言葉として受け入れられるのは、牧師の説教が神の言葉として聞かれるのと同じ原則による。それは、聖書の教えと合致しているかどうかである。合致していれば受け入れる、合致していなければ受け入れない。本来、牧師の言葉だから受け入れるのではなく、神の言葉の正しい釈義と解釈だから聞き入れるのである。

牧師の説教は（牧師に限らず、おおよそ説教というものは）、聖書の真の著者である聖霊の照明を求める祈りと、正しい学びによって到達する聖書の正当な釈義と、その釈義を聖霊の導きによって聞く者たちの現状にふさわしく適用する解釈を、聖霊の感動によって押し出されて語るべきものである。そのような説教は、真の意味で預言である。ペンテコステの説教は、単に正しい釈義に立った解釈を語るだけではない。それはほかの福音派の牧師に任せておけばよい。それを聖霊の励ましと感動を受けて、その場の実情と必要にふさわしく、押し出されて語るものである。

９．　エリヤハウスが福音的キリスト教ではない理由

エリヤハウスがその主張とは裏腹に、福音的キリスト教ではなくむしろ異端に近いものであることは、以下の理由で分かる。

- **聖書の誤った読み方をしている。** 聖書全体の教えと調和しない断片的読み方をして、自分たちの主張を聖書に読み込んでいる。聖書はその意味を読み出すものであって、読み込むものではない。たとえば彼らの言う先祖の罪の呪いは、十戒のひとつのフレーズを拡大解釈して、同じ事柄について教えられている聖書の他の記述をまったく無視している。聖書は、子が親の罪を負うべきでなく、親が子の罪を負うべきでないことを、いくどもくり返して教えている。（申命 24：16、エレ 31：29〜30、エゼ 18：１〜20）
- **聖書以外の教えを中枢に据えている。** 非科学的な心理学と洗脳的カウンセリングを自分たちの教えと実践の中枢に、周辺ではなく中枢に据えている。周辺ならばまだ間違いが多いで済まされるかもしれないが、中枢においては単なる間違いではない。科学的にもあるいは臨床的にも証明された聖書外の事柄を、聖書の教えと混ぜ合わせてキリスト教を名乗ることにも問題はあるが、（例えば、キリスト教式マッサージ、キリスト教式教育など）科学的にも臨床的にも証明されていない心理学的手法を中心にもってきて、福音的キリスト教を名乗ることは許されない。

  現代では心理学も多くのデータを集めて帰納法的に、つまり、科学的に考える方向に向かいつつあるが、まだまだ、怪しげな権威を前提に、非科学的な演繹法に頼るところが多い。夢・性的衝動・潜在意識・深層心理などを説いた、フロイトやユングの時代は全く非科学的であった。したがってエリヤハウスのカウンセリングも、客観的事実に基づいて行われてはいない上、そのカウンセリングの手法は、心霊術や東洋宗教哲学による洗脳、マインドコントロールである。
- **自らの主張に反して、聖書の教えに立っていない。** 聖書の教えに立つとは、聖書全体から導き出された調和のとれた教えを、自分たちの主張と存在の土台とすることである。彼らは、聖書の間違った解釈、自分に都合のいい解釈を、福音主義的聖書観を主張することによって正当化している。自分たちが福音主義であることを強く主張することによって福音主義者たちを欺き、彼らが恐れて反論できないようにしている。偽りの福音主義に容易に欺かれる人々は、「心情的福音主義者」であって真の福音主義者ではない。
- **体験主義である。** 体験主義は、ペンテコステ信仰やカリスマ信仰、あるいは第三の波信仰に侵入しやすい。もともとペンテコステ信仰は体験主義的傾向を帯びていた。良い体験は良いもの。病気は治ればいい。精神疾患からは解放されればいい。教会は成長すればいい。これは容易に実利主義、ご利益主義につながった。アッセンブリーズ・オブ・ゴッドは、自らの歴史の手痛い体験を通して体験主義の危険を学び、体験に対しては注意深い取り扱いを会得した。しかし、カリスマや第三の波の指導者たちはもともと、体験的な信仰を持っていなかった「理神論的福音主義者」であ

ったのに、ペンテコステ教会で起こっている奇跡の数々に驚嘆して、ペンテコステ的信仰に鞍替えした人々であり、容易に体験主義に陥って流されている。例えばピーター・ワグナーも、ジョン・ウインバーも、日本では奥山実もそうである。

・ **聖書に記されていない、異教的な理念と手法が用いられている。**キリスト教と心霊術あるいは東洋思想とのシンクレティズムである。たとえそれが心理療法として実際に効果を発揮したとしても、キリスト教信仰の中枢に置くのは重大な誤りである。

１０．　わたしたちペンテコステ信仰を持つ者の役割

私たちはいま、曲がりなりにも正当な信仰を持とうとしている。また事実、基本的には正しい信仰を持っていると自覚している。そのような私たちは、これからどういう行動をしていくべきだろうか。

・ **自分たちの中から、誤りを取り除く。** どの教派どの団体にも誤りはある。私たちのアッセンブリーズ・オブ・ゴッドにも、伝統的に引き継いできた誤りがある。初期の創立者たちの中に、聖書や神学を専門的に学んだ人がほとんどおらず、せいぜい聖書学校レベルの学びをしただけの者が大半であった。ただ、そのほとんどが福音的な立場に立つ、メソジストやホーリネス、あるいはバプテスト系の人々によって占められていたために、基本的に福音的な神学の基盤を堅持していた。

ところが聖霊のバプテスマという新たな体験をし、癒しや奇跡、あるいは預言や異言という聖霊のみ業を見るようになって、それらを正当に組み入れた神学を形成しなければならなくなった。幸い、アッセンブリーズ・オブ・ゴッドの中にはバプテストを背景とする人々が多く、教団として、聖霊のバプテスマを「瞬間的清め」として受け取る間違いは犯さなかったが、個々の教会や働き人の中には、瞬間的清めと受け取ったものも多く、ホーリネス的な物事の考え方がいつまでも残った。日本では、ホールネスの四重の福音に対して、五重の福音というフレーズが用いられた時期がった。それは必ずしも悪いことばかりではなかったが、望ましくない部分も多い。

私たちの教団は伝統的に、ともすれば体験主義に流れ、繁栄の福音、積極的思考、悪霊の追い出し、教会成長、カウンセリングなどにとらわれがちだというのは事実である。また、ディスペンセーション神学に流れて、特定の終末論に固執するところも残っている。聖書が明確に示している分野と、釈義に幅のでる分野を分けて、許容性のある信仰を持たなければならない。

私たちが伝統的に引き継いできた間違いの中で、バプテスト的なものには、洗礼の理解、教会論の軽視、強いディスペンセーション的傾向があり、まだスコフィールド・バイブルを片手に説教をする者が残っている。ホーリネス的なものには、可視的な清めの強調、教会論の軽視、教職制度、聖餐論などがある。またそれらとは

別に、あいまいなタイポロジーや霊的解釈を多用する、レストレーションの残滓もある。

- **正しい信仰を教える。** 私たちはペンテコステ信仰を告白する中では、最も中心的な働きをしてきた教会である。またこれからもそうであり続けるだろう。私たちの信仰の在り方が、他のペンテコステ系の教会や（カリスマ・第三の波も含めて）福音派の教会の模範となれるように望む。それで、誤った信仰を持っている人たち、とくに、異端に近いようなペンテコステ信仰を抱いている教会や個人には、忍耐と寛容をもって、教えていく責任があると考える。実際には困難な働きであるが、愛をもって、柔和な広い心で積極的に対話をし、誤りに気付かせてあげなければならない。（ガラ 6：1）
- **緩やかな信仰共同体であることを貫き通す。** 排他主義にならないことが肝要である。先にも触れたが、アッセンブリーズ・オブ・ゴッドは、バプテスト的な教会論の弱さを継承している。それに加えて、ペンテコステ体験のために所属していた団体や教会から追放された、苦い経験も持っている。そのために、いわゆる教団組織を嫌うところがある。（日本は例外）そのような背景もあって、アメリカ・アッセンブリーズ・オブ・ゴッドは、教団籍剥奪とか追放という処分をできるだけ避けてきた。倫理面ではホーリネスの厳しさが残り、追放や自主脱退の処置があったが、教理面ではかなり寛容で多様性を認めてきた。

  いわゆる信仰綱要も、これに完全に一致しなければ、あるいは同意しなければ追放するというものではなく、これに反対しなければ、一緒にいてよろしいというものであった。つまり、自分の信仰や見解としては完全には同意していないが、多様性を認めて、信仰綱要の立場も受け入れることが出来るというのであれば、交わりに残るべきだという程度のものであった。剥奪し追放して、自分たちの交わりの純粋性を保つのではなく、包容し、留めおいて、より大きな間違いに陥らないように諭し、正しい方向へ導けるように努力すべきである。そのために、愛をもって辛らつに論じ合わなければならない。信仰綱要に合わないから、自分たちの神学や伝統に合致しないからと言って、論じ合いもせずに追放するのは、愛ではない。したがって、エリヤハウスを取り入れているからと言って、直ちに異端扱いをしたり追放したりしてはならない。自分たちの内に存在する痛みとして止め、愛と忍耐をもって間違いを正していくべきである。私たちは、カルビンとその後継者たちの峻厳さに倣ってはならない。とはいえ、エリヤハウスの間違いは単なる間違いではなく、限りなく異端に近いものである。兄弟の勧告と教えに背を向け続けた場合は、教団は断固たる処置をしなければならなくなる・・・・のを恐れる。
- **自分たちの信仰と神学に足りないものを満たす。** エリヤハウスの主張、あるいは神学を学ぶと、私たちのペンテコステ信仰を持つ者の、聖書理解と神学の脆弱を痛感させられる。私たちのペンテコステ神学と実践には、大きな欠点がある。その欠点の

ために、エリヤハウスという「キリスト教もどき」「ペンテコステ信仰もどき」の侵入を許してしまう。私たちはその点をしっかりと理解し、自分たちを改善していかなければならない。

エリヤハウスは、キリストの救いを受けても、過去の被害の苦い体験が潜在意識として残っているために、いつまでも苦しみが絶えないと主張し、その苦しみの根を取り除くために、インナー・ヒーリングを行う。しかしキリストの救いは、そんな深刻な限界を抱えたものなのか。単なる立場の救いで（positional salvation）、現実の救いのプロセスはインナー・ヒーリングの手助けがなければ、やっていけないような中途半端なものなのか。私たちは、キリストの救いは人間のすべての面に及ぶと考えている。立場にもプロセスにも、キリストの救いの力が及ぶと信じている。私たちに必要なのは怪しげな想像のキリストではなく、大祭司として今もとりなしていてくださるキリストである。それが聖書の教えである。キリストの救いの力を、クリスチャン生活という現実のプロセスの中で具現化していくのは、キリストの霊である聖霊の働きであると信じている。しかし、その信仰が聖霊の神学として確立されておらず、確実に実践されてもいない。

例えば、私たちのペンテコステ信仰による聖霊のバプテスマの理解は、ルカの神学による宣教学的な理解である。聖霊のバプテスマは、宣教の力の付与であり、異言はそのしるしであると言い続けてきた。異言は単なる「しるし」という立場しか与えられていない。正当に評価されていないのである。そのために、「異言を求めるのではなく、聖霊のバプテスマを求めよ」と勧められたり、勧めたりしてきた。しかし、ルカが記した宣教論的な聖霊のバプテスマの理解だけでは、聖書の教える聖霊のバプテスマの神学とは言えない。パウロは聖霊のバプテスマという言葉は用いなかったが、聖霊の働きについて、また異言についてたくさん語っている。そのパウロの教えとルカの教えを良く調和させた、聖霊のバプテスマの理解があったならば、エリヤハウスの活動の余地はなかったはずである。

ここでパウロの聖霊の神学を充分に取り扱うことはできないが、拙著「聖霊の交わり」の「Ⅲ．新約時代の交わり」「Ⅳ．神様との交わりの高嶺」「Ⅴ．聖霊のバプテスマと異言」を、是非お読みいただきたい。（長文ですので、PC ファイルで差し上げます）この文は、エリヤハウスについて知る前（2002 年 1 月）に書かれていますので、エリヤハウスとは全く関係がありません。しかし、この文に明らかにされている「小生の」聖霊のバプテスマの神学が、広く知られて実践されていたら、エリヤハウスが不要のものであることがはっきりしていたはずです。

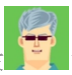
パウロは、聖霊の働きの重要な一面として、神と人との交わりを仲介することがあると教えている。キリストの仲介は、贖いによる神と人との和平の仲介である。聖霊の仲介は、和平後の神と人との交わりの仲介である。パウロとルカの神学を調和させると、聖霊のバプテスマは、単なる宣教のための力の付与ではなく、むしろ、

神と人との交わりの高嶺である。その交わりの高嶺を可能にするのが、聖霊の仲介であり、そのために聖霊が準備してくださったのが異言である。つまり、異言がなければ聖霊のバプテスマそのものがあり得ない。異言こそ聖霊のバプテスマの最も大切な要素である。これを単なるしるしとして扱い、あたかも無用の長物であるかのように言うことさえある私たちの神学が、間違っているのであり、エリヤハウスはその間違いを突いたのである。

聖霊は異言を用いて、私たちの言葉では表現できない、あるいは自分自身で気づいていない心の奥に潜むうめきを自由に表現させ、神との深い交わりを可能にさせてくださる。（ロマ 8：26） そこには当然、心理学的な解放感も付随する。人間は心の思いを言い表すことで、解放感を味わうことが出来る。しかしそのような心理的解放感を、聖霊のバプテスマの目的と考えてはならない。神との深い交わり、自分を自由に表現し告白するところにのみ可能とされる、言語的な隔てと心理的隔てとを破った交わりこそが目的である。その神との深い感動的な交わりは、いよいよ神を愛し慕い敬いお仕えする動機となり、また激しい情熱と熱心と怖れを知らない信仰の源となる。私たちが主張してきた宣教の力の付与は、聖霊のバプテスマの目的ではなく、多くの結果の中の、ひとつの顕著な現れに過ぎない。それはまた、より高い清めへの動機となり、互いに愛し合う動機ともなる。

私たちはこれから、パウロとルカの聖霊論を融合させ、さらにヨハネの聖霊論も加え、その上に、ヘブル書に記されている人となられた大祭司キリストの働きも合わせた、総合的な聖霊論を構築しなければならない。聖書全体に記されている聖霊に関する教えをもっと正確に理解し、それらを一つの全体とした上で、改めて聖霊のバプテスマを理解した会を形成し、信徒を指導していかなければならない。

記憶による告発はどこまで信用できる？

橘玲 | 作家10/29(月) 17:00

- ツイート
- シェア
- ブックマーク



（写真：ロイター/アフロ）

1990 年、現職警官が悪魔崇拝で有罪を宣告されるという衝撃的な事件が全米を驚かせました。熱心なクリスチャンで共和党地方本部の代表者でもあった父親が、成人した娘から、幼い頃に悪魔を呼び出す乱交パーティで強姦されたと告発され、陪審員がそれを認めたのです。

なぜこの話を思い出したかというと、よく似たことが最近のアメリカで起きたからです。トランプ大統領が連邦最高裁の判事に指名した保守派のブレット・カバノー氏に対し、大学教授の女性が 1982 年に性的暴行を受けたと告発しました。FBI の調査でも疑惑を裏づける

証拠は見つからなかったとして共和党が強行採決し、カバノー氏は最高裁判事に就任しましたが、民主党は納得せずはげしい対立が続いています。

レイプは重大な犯罪ですから、それが事実であればきびしい処罰は当然です。しかしその一方で、証拠もないのに疑惑だけで責任をとれと強要するのでは法治の否定にしかなりません。しかもこれは 36 年も前の出来事で、どれほど捜査したところで決定的な証拠が見つかる可能性はなく、被害者の証言を信じるかどうかの堂々巡りになるだけです。

アメリカの女性活動家は「被害者が証言すればそれが事実だ」と主張していますが、これについてはリベラル派の知識人からも、「奴隷制時代には、白人女性が"レイプされた"と証言するだけで、なんの証拠もなく黒人はリンチされて殺された」と指摘されています。人権を守らなければならないのは被害者も被疑者も同じで、市民の地位や権利を奪うには法で定められた厳密な手続きが要求されます。

過去の性的暴行の告発を慎重に取り扱うべき理由は、記憶が書き換えられることがわかっているからです。しかも、非常に簡単に。

成人の被験者に対し、親や兄が「お前が 5 歳のとき、ショッピングセンターで迷子になったことを覚えているかい？」と訊きます。なんの記憶もない被験者は「覚えていない」とこたえますが、「ポロシャツを着た親切な老人がお前を母さんのところに連れてきたじゃないか」「暑い日で、お前が泣き止んでからアイスクリームをいっしょに食べたよね」などとディテールを積み重ねられると、被験者はなんとかしてその体験を思い出そうとし、しばらくすると「ああ、そういわれてみれば、そんなこともあったよね」といいだします。

これは被験者が、ウソだとわかって話を合わせているのではありません。親しいひとから存在しない過去を告げられた脳は、記憶がないという不愉快な状況から逃れるために、無意識のうちに都合のいい物語を"捏造"するのです。アメリカ心理学会や精神医学会は、「回復した記憶が真実か否かを判断する決定的な手段はない」と結論づけました。

もちろんこれは、カバノー氏を告発した女性大学教授がウソをついているということではありません。しかし、三十余年のあいだに記憶が変容していないと証明することも不可能

でしょう。目撃者や記録などの証拠がなければ、どれほどリアルな証言も、それだけでは効力をもたないのです。

ちなみに父親を悪魔崇拝で告発した娘は、その後、セラピストから「あなたの苦しさの原因は幼児期の性的虐待によるものだ」という偽りの記憶を植えつけられていたことが明らかになりました。父親はただちに釈放され、娘を訴えました。

参考：E.F.ロフタス、K.ケッチャム『抑圧された記憶の神話―偽りの性的虐待の記憶をめぐって』（誠信書房）